
魔法少女リリカルなのは ~ラブ&ピース~

ドリフ万歳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～ラブ&ピース～

【Nコード】

N4665U

【作者名】

ドリフ万歳

【あらすじ】

自称オタクな男が運命の女神の車輪にひき殺されミンチにされてしまった。ひき殺した犯人である女神も実は同志である事がわかり、意気投合してしまった男はリリカルな世界へ転生。座右の銘である「ラブ&ピース」を元にして今日も頑張りまっせ！ 注

注意事項

この作品には、原作作品からの魔法や地名人物名の引用や改変などが含まれます。また、他のアニメや漫画からも魔法や地名、人物名などが登場する可能性があります。『主人公最強／転生／原作改変／キャラ改変／作者独自解釈／ハーレム』など

の要素が含まれます。こういった要素がお嫌いな方はブラウザの戻るを押す事をお勧めいたします。

本作をお読みいただく上での注意事項

本作をお読みいただく上での注意事項

本作は作者の妄想により成り立ちます。

この為、原作の登場人物の背景や出会う時期等も、全て原作からは乖離します。

おちゃらけた話が入る事が多いですが、締めるところはきっちり締めます。

基本的に、題名にあるようにラブ&ピースを前提として話を進めます。

この為、本来敵対する勢力が見方になったりする事が起こりえますがご了承下さい。

また、主人公は基本チートというかバグです。

あらゆる意味でぶっ飛んだ能力を持っていますが、それも全てはラブ&ピースの為と思って下さい。

このような作品ではありませんが、お楽しみいただければ幸いです。

以上、作者より。

第零輪：転がる車輪

俺の名前は工藤正太郎。

華も恥らう、28歳の童貞様だ！

……言つて悲しくなつて来るのでやめよう。

そんな俺だが、ご他聞に漏れずオタクである。

といつても、萌系はそんなに好きではなくどちらかと言えば熱血系や漢臭い物語が好きだ。

勿論萌系もいけなくは無いが、そんなにレパートリーは多くは無
い。

……ちなみにオタクではあるが、一応ちゃんと大学も出て就職も
している。

決して自宅警備員などでは無いぞ！

んで、そんな俺がなしてこのような自己紹介的な事を一人考えて
いるかと言つと……只今絶賛現実逃避中なのですよ。

というのも、遡る事本日の午後19時頃、会社からの帰宅の最中
に俺はあるう事が巨大な車輪に轢かれてしまいそのままミンチに……
うえ、思い出したら気分悪くなってきた……。

まあ、そんな普通あり得ないような死に方をしてしまい、この場
で目覚めてから数時間は茫然自失状態だったのだがなんとか気持ち
を落ち着けたところ……突然目の前に超激烈な美人さんが現れた訳
です！

しかも瞳潤んでるし！

これぞ理不尽な死に方をしてしまった俺への神のお情け！

と思ひ、問答無用でルパンダイブを決行しそうになったその瞬間
……『ごめんなさいっ！』とその美人さんが日本人も真つ青な見事

なDO GE ZAを決めるものですからね、ついつい10点満点の札を挙げてしまいました。

え？

札なんてどこに持ってたのだった？

そいつを聞くのは野暮つてもんですぜ、お客さん。

まあ、そんなアホな事はおいとして、土下座状態では話しようが無いのでとりあえず頭を上げて貰い話を聞く事に。

話を聞くと、彼女の名前は『フォルトゥナ』というらしく、ロマ出身の女神様らしい。

彼女は自身が持つ運命を象徴する車輪の整備をしていたらしいのだが……それが何かの拍子に転がってしまいそのまま下界まで真逆さま……。

その後、偶然にも俺に車輪が激突し俺はあえなくミンチになってしまったと、こういう訳のようだ。

『ほ、本当に申し訳ありません。私の管理が行き届いていなかったばかりに……』

「……なんというか、どんだけ運が悪いのよ、俺って……」

『い、いえ、貴方の運命を確認したところ、貴方は98歳まで生きる運命でした……』

「……マジ？」

『はい……』

うわあ、それじゃ俺っておもつくそ長寿だったんだなあ。

惜しい事をしたもんだ。

しかし、既に死んでしまった以上はどうにもなるまい……諦めるしか……。

『あ、あの……』

「はい？」

『本来我々神の座にいる者が、直接的にしる間接的にしる下界にいる生物を殺害するのは非常に不味い事態でして……その為、貴方には新しい人生を歩んで頂きたいと』

それってあれか、よく二次創作である転生ってやつかな？

まあ、生き返れるならいいか。

それだけでも十分だろう、能力まで望むのは強欲過ぎるというものだろう。

『仰る通り転生という形になります。しかし、よろしいのですか、本来なら望みのままを叶えるべきなのですが』

「いんや、過ぎた力なんてのは人間持たない方がいいもんなね。でもさ、何処に転生するか事前に教えて欲しいのと、今の記憶の保持だけは頼みたいかな」

『記憶の保持と今までの経験の保持については一切問題ありません、転生の際はそれが大前提となりますので。それと転生する場所ですが……申し訳ありません、同じ世界への転生は不可能なので別の世界に転生していただく事に……。』

「別の世界って？」

『＜魔法少女リリカルなのは＞の世界ですっ！』

「あのアニメのか？」

『実際はアニメを基にした、全くの別世界ですね』

あれって魔法少女って題名を冠している割に、結構熱血スポ根気味な感じなんだよね。

しかも主人公は、魔法少女じゃなく魔砲少女だし……。

まあ、あのアニメは萌系でありながら、結構熱い感じだから好きではある。

とはいえ、色々と納得出来ないところが多い作品ではあるのだが……。

『そうなんですっ！　なんでフェイトちゃんがあんなに悲しい思いをしなければならぬのですか?!』

うお?!

突然フォルトゥナさんが大声を上げた!

もしかこの女神……俺と同じでオタク入ってるのか?

『え、えと……実は結構下界の人間が創るサブカルチャーという物が、天界や魔界ではブームでして……』

「うわお、神様までオタクなのかよ、世も末だわな……まあ、しかしだ、あえてこう言おう……同志よ!」

そうしてがっしりとフォルトゥナさんの手を取り、<魔法少女リカルなのは>について熱く語り合った。

やれフェイトの境遇が納得出来ないだの、なのはが管理局入りを決めた事について両親は親としてどうなのか……はやての境遇についても納得が出来ないなどなど。

勿論いい作品でもあるので、非常に好感の持てる部分もあるのは間違いない。

しかし、こういった話になるとどうしてもそういったマイナス面が表立ってしまう。

故に二人してあの作品の矛盾というか、自分らの意見として納得出来ない部分で盛り上がってしまった。

「いやはやフォルトゥナさん、貴女なかなか見所がありますな!」

『いえ、私と同じ考えの方に会えて非常に嬉しいです!』

「しかし、よもや自分があの世界に行く事になるとはねえ……」

『……あの、その事で一つご相談が』

「はい？」

『先ほどは力は不要との事でしたが……どうでしょう、力を得て彼女らの運命を変えてしまつては』

運命を変えてしまふか……果たして一人の人間がそのような事をしているものなのだろうか？

確かにこれから転生する世界は物語を基にしているので筋書きはあるかもしれんが、そこに生きる人々は自由意志を持って生きていくのだから。

なら、幾ら俺が納得出来ないとはいえ、勝手にそれらの人々の運命を変えろというのは……流石に不味くは無いだろっか……。

『その点のご心配には及びません。確かに我々のような存在が運命を弄り回せば大問題ですが、その世界に生きる生命達が自らの力でもって運命を切り開く行為はなんら問題の無い行為なのです。』

「ふむ……そうになると、例えば俺が何らかの力を貰つたとしても、その力でフェイトが母親を失うという運命を改変したとしても、それは世界そのものには全く影響は無いと？」

『細かい部分での影響は出るかもしれませんが、世界から見れば些細な影響です』

随分と大雑把だが……まあ神様から見ればそんなものなもかもしれん。

そうなるのだ、俺が力を貰い誰かの運命を改変するのもその世界に生きる生命として運命を切り開く行為となる訳か。

それならば力を貰うのも吝かでは無いな。

確かにあの物語は、一見するとハッピーで終わっているが、その下には必ずといっていい程に登場人物の苦しい過去がある。

なのはにしても、五歳の頃に家族に甘えられず一人寂しく過ごし

ていた。

フェイトは母親に見捨てられた。

はやては両親が亡くなり、ヴォルケンリッターが現れるまで一人寂しく暮っていた。

等々、挙げれば結構な数の悲劇がある。

まあ、それらも人生の一部だし、その人を構成する一部である以上は勝手に手を加えるのもおかしいのだが……やはり俺としては幸せな思い出を多く持つ方がいいと思う。

なのでフォルトウナさんの勧めに従い力を貰う事にしよう。

独善的な行為ではあるのは間違い無いと思うが、これは俺自身が選ぶ道だ。

後悔は無い！

「決心が付いたよフォルトウナさん、貴女の勧めに従い力を貰いましょう！」

「わかりました、それではどのような力にしますか？」

力か……貰うと言ってもなかなか難しい。

やっぱりいきなり最初から最強の力を持つのはつまらないから、鍛えた時の限界を無くして貰おう。

そうすれば修行すればするほど強くなれるから、何れは最強に近づけるだろう。

まあ、あんまり戦闘とかはやりたくないけど。

後、あの物語の世界に存在する、過去／現在／未来の全ての魔法関係の知識や技術、それと設備が欲しい。

これは後々確実に必要になるはず。

「ちなみに、数の制限とかはあるんですか？」

『叶えられる願いの数は5つまでです。身体的な能力でも魔法的 능력でも可能ですが、あの世界に合わない力は持つ事が出来ません。』

「となると、リンカーコアは問題無いとして……例えばですが、霊視や霊体の操作といった事は可能でしょうか？」

『霊視や霊体の操作ですか……お待ち下さい………可能ですね』

「では、今から言う能力でお願いしますよ」

『わかりました』

「そうだ、デバイスってどうなります？ 恐らく必要になると思っけど……。」

『デバイスは能力とは別になります』

「了解、それじゃ希望能力言いますね」

- 1 . 鍛えれば鍛えるだけ魔力の最大値が増えるリンカーコア
- 2 . 鍛えれば鍛えるだけ強くなれる肉体
- 3 . リリカルなのは世界に存在する過去／現在／未来の全ての魔法技術<デバイス／医療／魔法理論／生体工学>に関する知識と技術とそれらを扱う機材<材料に関しては無制限>
- 4 . 霊視／霊との会話能力
- 5 . 霊体を操作する能力

「こんな感じでお願いしますわ」

『1～2までは可能です。しかし未来の技術は……』

「んじゃ、過去と現在のみで」

『それでしたら問題ありません。しかし、4と5の能力は必要なのでしょうか？』

「ええ、少々気になる事がありましたね」

『と、申されますと？』

気になる事というのは、アリシアが死亡したという魔導炉の暴走事故の事だ。

あの事故って確か記憶によると、他の世界にまで影響する程の大事故だったはず。

にも関わらずアリシアの肉体はほぼ完全な状態で残っている。

この事からもしかしたら彼女は完全には死亡していない可能性がある
あるのではと考えた。

もしも肉体から魂が離れ魂の成長が止まった場合、密接に繋がっ
ている肉体の成長も止まるのではないか？

そして更に言えば、彼女の肉体そのものはプレシアにより保存さ
れている。

プレシアの事だから、欠損があったとしても修復するだろうし。

と、こうして改めて考えてみると、アリシアの状態は<停滞>と
いう状態なのではなかるうかと思うのだ。

まあ、素人考えの浅はかな推測ではあるのだが……。

『なるほど、確かに仰る通りかもしれませんが』

「まあ、この場でフォルトゥナさんに確認して貰えば早いんでしょ
うけど。恐らく運命に干渉してしまうんでしょう？」

『……仰る通りです、お役に立てず申し訳ないです』

「仕方ないっすよ、まあ、もしも本当に死亡しているとしたら……
その時は仕方ないとは思いますが……」

一応過去の魔法医療や生体工学の知識や技術も要望したから、ア
ルハザードの知識なんかも取得出来るはず。

となれば、もしかしたら、死亡した状態から復帰出来る技術もあ
るかもしれない。

まあ、どちらも希望的観測ではあるので、駄目かもしれないけど。

『では、続けてデバイスに逝きましよう！』

「なんか、楽しくなつてない？」

『……そんな事はありませんよ』

そう言うなら目を逸らさずに話なさいってば。

まあ、俺もある意味では面白いが、これから先の人生に関わる事だからな、あまりおふざけしている場合では無い。

しっかりと決めねば。

「デバイスかあ、なかなか難しいな」

「今後を考えると、インテリジェントデバイスかユニゾンデバイスがいいと思いますが」

「確かに……でも直ぐには思いつかないような……」

「なら私にお任せ下さい、それと容姿はいかがなさいますか？」

「つか、容姿とか決めるのって運命を弄くる事にならないんです？」

「生れ落ちる前であれば、まだ何も運命は決まっております。故に私のように運命を司る神が運命を決定します。」

なるほど、そういう事だったのか。

という事はだ、生まれる前の運命については神様が決めていて、
して、生まれた後の人生上起きる大きな出来事なんかも決めている
のか？

「それについては、どういった事が起きるといふ細かい事までは決定していません。しかし、何かしらの人生上の試練のようなものは、人それぞれに存在します。」

「そうなのか……という事は、俺の場合だともしかして……」

「ご推察の通り、あの物語の登場人物の不幸を取り除く事こそが貴方に課せられる人生上の試練です！」

「うへ、そりやまたえらい責任重大、かつ、大変な試練だ……まあ、遣り甲斐はあるがなっ！」

「そうでしょうとも、同志ならっ！」

しかし、すでに人生上の試練まで決定しているのか俺は。

別段文句は無いが、やるならやるで計画性を持ってやらないと多分達成するのは難しい。

とりあえず三人娘に絞って考えてみても、結構あるなあ。

なのはに関して、第一に五歳の頃に発生する父親の事故をなんとかする必要がある。

あの事故が後々までかなり影響しているようだし、後は甘えさせる事もさせないと駄目だろうなあ。

加えてAs後に発生する撃墜事件もなんとかせにやいかん。

フェイトの場合は、母親の病気を治し、かつ、アリシアの蘇生をしなければならぬ。

その後に母親であるプレシアを説得し、親子三人で暮せるようにする必要がある。

その上で、生まれについてのコンプレックスもなんとかせにやらんか。

はやてに至っては、正直両親の死を止める事は無理だろう。

だもんだから、早めの段階で接触しておく必要がある。

それにだ、初代のリインフォースが死んだ事も少なからず彼女には影響しているだろう。

となると、初代リインフォースも助ける必要がある、かつ、二代目のリインフォースも生まれるようにしなければならぬ。

こうして考えてみると、やっぱり色々あるんだよなあ。

<StrikerS>に出てくるキャラだつて居る訳だし、本当に計画性を持って望まないと達成は無理っぽい。

早い段階で計画決めておこう。

……
……

『お待たせしました、デバイスと容姿が決定しました』
「どんな感じ？」

『デバイスは3個で、一つはインテリジェントデバイス、一つはユニゾンデバイス、最後がストレージデバイスです』

「多いな、最後のストレージは何に使うんだ？」

『お望みの機材や材料などが収納されています。なお、材料に関してはお望み通り無制限に使えます。』

「ふむふむ、となると実際はインテリジェントとユニゾンの二つって事か……ちなみにさ、頼んだ知識の中にアルハザードの知識って入ってるの？」

『過去の知識に該当しますので入っていますね』

なるほど、それなら色々とやりやすくなる。

しかし、デバイス三個も持つ事になるのか。

いいんだらうか？

『ちなみに私が直接作製するデバイスですので、非常に強力な物になります』

「……大丈夫なんかそれ」

『問題ありませんっ！』

「そっぴや、ユニゾンデバイスの見た目はどんな感じなんだ？」

『ご希望があればそれに合わせますが』

「ふむ……」

ユニゾンデバイスの見た目が……やっぱり女性タイプだよな。

男と合体なんて、んなくアツーー！>な感じはご勘弁。

希望通りでいけるなら……あれにしようかな、ある意味では永遠の美貌を持つし。

よし、決めた！

「デバイスの見た目は……だ！」

「これはまたいい趣味ですね、というより、かなり古い作品ですが」

「いいんだよ好きなんだからさ、俺の容姿については産まれてからのお楽しみって事で聞かないでおく事にするよ」

「わかりました、不細工ではありませんのでその点だけはお安心を」

さてと、これで用意は整ったのかね。

後は何処の家に産まれるのだが、これも聞かないでおこう。

まあ、最低限海鳴市には産まれるとは思いつけど……そうじゃなきゃやりようがないし。

しかし、二度目の人生か……どうなる事やら。

まあ、とりあえず、俺の座右の銘である『ラブ&ピース』を目指していきますかね。

『それでは転生の準備に入ります。生れ落ちるまでは意識がありませんので。』

「了解、フォルトゥナさんにはもう会う事は無いかな」

『そうですね……ですが、私は常に下界を見ているのでもしものときは……お会いする事になるかもしれません』

「そっか、まあ出来る限りを尽くして頑張るさ」

『ええ、頑張つて下さい、同志よ！』

「応ともさー！」

こうしてついに転生する事になった訳だが……果たしてどうなる

事か。

人生つてのは苦難や驚きの連続なんて言うし、きつと計画通りにはいかないだろう。

それでも、なんとかして皆をハッピーにしなけば！

さあ、第二の人生、頑張って生きよう！

第壱話：産まれたその先は……

ちわつす、同志フォルトゥナにより転生しました工藤正太郎、現在四歳です。

え？

四歳までの描写はどうしたのだった？

頼むから忘れさせて……おながいします……。

流石に三十路手前までいった人間が赤ちゃんプレイをするのは……

……非常に辛かった……。

二次創作とかで結構この辺りすっ飛ばされてたけど、自分の身に降りかかってみると本当に辛いというのがよくわかる。

もうね、恥ずかしさのあまり盗んだバイクで逃げ出さなくなりましたよ……。

まあ、そんな訳でして四歳までの描写はどうか勘弁しておくんないまし。

そんな俺ですが、転生直後にどえらい事態が発生しました。

それが何かと言うと……両親が飛行機事故で亡くなりました……。

もうね、マジで凹みます。

つかですね、何故に転生した俺にそんな事が起きたのかと疑問に思っていたところ、夢枕に同志フォルトゥナが現れまして事故が発生した原因を話してくれた。

というのも、その事故自体が俺に課せられた人生上の試練の一つらしい。

これは、非常に強力な力を有している俺だからこそ起きた事のように、幾ら同志フォルトゥナといえども止める事が出来なかったらしい。

非常に申し訳無さそうにしていた。

とはいえ事故の事は同志の責任では無いだろうと思う。
だから、そんなに気に病まないでくれと同志には話しておいた。

ただ、一つだけ両親の事でどうしても聞いておきたい事があった。
それは、ちゃんと両親が天国というか、死後も安らかであるのか
どうかだ。

俺がそれを同志フォルトゥナに聞いたところ、彼女は微笑みながら
俺の両親の魂は安息の中にあると話してくれた。

同志からその話を聞かされて本当にほっとした。
何も親孝行出来ていなかったから、せめてそれだけとは思っていた
から。

とはいえ、その事故の際に俺だけが奇跡的に助かりまして……俺
を助けてくれた救助隊員の方が俺をそのまま養子として引き取って
くれたのです。

いやはや、感謝感激雨あられですわ。

あのままだと、俺親無しで施設行きでしたからねえ……。

と、思っていた時期が俺にもありました……。

引き取られてからは頗る順風満帆だったのだが……その引き取っ
てくれた新しい両親までもが俺が三歳の時に事故で亡くなってしま
った……。

これで俺は二度、両親を失った事に……。

そう考えると本気で泣きたい……。

だがしかし、俺には泣く訳にはいかない理由がある。

それが何かというと、引き取り先で義理の妹となった娘の存在。

彼女も俺と同じ四歳ではあるのですが、出生日の関係で義兄とい

う事になった。

ので兄としても、俺を引き取ってくれた両親の恩義に報いる為にも彼女を悲しませる訳にはいかない。

その為、兄である俺は決して泣く訳にはいかず常に笑顔でいなければならぬ。

何せあの娘……両親が死んだ後、酷く塞ぎこんでしまったから……。

何とか元気付けようと、俺はとにかく彼女を笑わせる事にした。その為なら、どんなバカな事もやった。

結果、あの娘も徐々にはあるが本来の明るい性格に戻り始めたようで、今ではよく笑ってくれる。

まあ、兄である俺への甘えが非常に強くなってしまった感はあるが……こればかりは致し方ないだろう。

んで、その妹というのが……なんとまあこれまた運命の悪戯かあのく八神はやて>なのだ。

彼女の事を知ったときはそりやもう、作為的な物を感じずにはいられなかった。

俺はこの世界の主人公達の悲しみを拭い去る為、運命の女神フルトウナにより転生したが……よもやここまでとわ……。

ご都合主義と取られてもしょうがない位ではなかるうかと思う。

運命の悪戯なのかはたまた神による悪戯なのかはわからないが、俺はく八神はやて>の兄く八神正太郎>として生きる事になった以上は全力で彼女を救わねばならぬ。

本来なら両親が亡くなるという悲しみも防がなければならなかったのかもしれないが……同志フルトウナによればそれはく八神はやて>に課せられた人生上の試練であり、どうあっても回避する事は出来ないらしい。

ならばこそ、義理とはいえ兄となった俺はこれ以上はやてに辛い

思いをさせる訳にはいかない。

そう思い、俺は出来る限りはやての傍に居るようにしている。

何せ今は俺とはやては二人暮らしだし。

ぶつちやけ、四歳児が二人暮らしって……常識的に考えてあり得ないのだが、何故か周りが干渉して来る事が無い。

そもそも俺とはやてに関しての周りからの認知がどうも薄い気がする。

これは恐らくはあれだ、グレアムの仕業だろう。

というか、それしか考えられん。

まあ、今の俺ではそれがはつきりとはわからないのが痛いところなのだが……。

あ、ちなみにだが、俺の能力に関しては五歳の誕生日にデバイスが手元に来た時に解放されるらしい。

融合騎であるあれも来るので、家族が増える事になる。

んで、能力の話だが同志フォルトゥナ曰く俺が望んだ以外の能力というか……才能を詰め込んだらしい。

その詰め込んだ能力というか才能が余りにも強力過ぎる為、デバイスが無い状態で暴走しないように封印をしているとの話。

ぶつちやけ、その才能とやらの内容を聞いた時……マジで頭抱えた。

幾らなんでもやり過ぎだ。

思わずハリセンで同志に対して突っ込みいれてしまった……。

女神に突っ込み入れる俺って一体……。

まあ、そんなこんなで色々あるのだが、俺達兄弟は仲睦まじく暮している。

これから先どうするか、早めに考え「兄ちゃん!」

「およ、どしたはやて？」
「もう、お散歩の時間やよ！」
「ありゃ、もうそんな時間だったか悪い悪い」
「もう！」

はやての足だが……既に麻痺の兆候が出始めており足首から下が思うように動かせない。

この為、両親が存命の時から医者に掛かり車椅子生活が続いている。

このままだと色々不便だろうけど、正直な話はやての足は病気で無い以上、治す為にはあの<闇の書>を<夜天の書>に戻さなければならぬ。

勿論、管制人格を消す事無く戻す必要がある。

その算段は、デバイスが来てから始めようと考えている。

下手に今の段階であれこれしても、正直成功するとは思えない。

失敗が許されない以上は、きっちり計画を立てて必ず成功させねば！

可愛い妹の為だしな！

「んじゃ今日は何処に行くかねえ」

「公園で遊びたい！」

「OKだ、妹よ、んじゃ公園に向け出発！」

「おー！」

てな具合で、本日も我が最愛の妹と共に散歩に繰り出すのである。これから先、色々と問題も多いだろうけど、座右の銘である<ラブ&ピース>を忘れる事無く生きていこう。

最愛の妹や、これから出会うであろう全ての人を幸せにする為に……。

第壱話：産まれたその先は……（後書き）

遅くなりましたが、二話目の投稿です。

今回はまだ導入部分なのでデバイスは出てきません。

デバイスの設定等については、登場次第掲載いたします。
それでは、次回もよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4665u/>

魔法少女リリカルなのは ~ラブ&ピース~

2011年7月20日03時11分発行